

## 河井継之助の忠義について

この2ヶ月ほど前から、本屋へ行くと司馬遼太郎『峠』の文庫本が平積みされている。手に取って見ると、本の帯に「最後の侍がいよいよ映画化」と書いてあった。しかし、本来今年の7月に公開されるはずが、コロナ禍のため来年に延期されたいらしい。

この『峠』が出版された時に読んだときの感動は大きかった。昭和40年のことだった。当時勤めていた会社の仲間が直江津工場へ転勤というので、この『峠』を饞別に贈ったりした。ところが、その後半世紀の間に北越戦争について書かれた本に何冊か出会い、司馬遼太郎が描いた河井継之助像と異なった見方がいくつかあることを知った。

その一つ。長岡藩では、藩論が割れていた。藩主の先代忠恭は丹後の松平家出身の婿養子であり、現藩主忠訓も二代続きの婿養子で三河松平家出身、共に幕府への忠誠心が篤かった。二人の藩主は、河井継之助が藩政改革に腕を振るい佐幕派であることから重用した。他方、家老たちは筆頭家老を始めとして藩存続のためには新政府軍とは戦うべきではないという恭順派、西欧列強がアジアの国内対立を利用して植民地化を進めており内戦はすべきではないとの開明派など、藩では激論が戦わされていた。小藩（7万5千石）の生きる道は恭順しかなく、戦いになれば人命は多く失われ、家屋、田畑の損失は莫大となる。佐幕派の継之助の行動は、「時勢を無視した軽率な行動」だと考える人々がいたのである。しかるに、この二人の藩主に認められた河井継之助は家老に抜擢され、逆に恭順派の筆頭家老稲垣平助は家老職を解かれた。継之助は、さらに上席家老、執政に任命され軍事総督にもなって藩の全権を握った。

中山道を進んできた新政府軍の総指揮は山縣有朋と黒田清隆が取っていた。しかし、戦いを避けるための新政府軍と長岡藩との会談、いわゆる「小千谷会談」は山縣、黒田の到着は遅れており、若い軍監岩村精一郎と河井継之助との会談になった。河井は長岡藩の中立を訴え、会津、米沢藩との調停のため時間を欲しいと要求した。岩村は、長岡藩は軍備増強をしてきた上に時間稼ぎをするのかと憤

然として拒絶した。河井の強硬な態度に反発したことも一因だった。この両者はいずれも外交、交渉ごとには不適格なタイプであり、会談は30分足らずで決裂したという。のちに山縣はなぜ岩村を河井の会談に出したか悔いたという話もある。また、河井の時勢を読む情報分析は甘く判断を誤ったからという見方で書いた書物もある。

その二つ。河井継之助の人物については辛い評がある。河井の批判派が書いたものであるから辛いのは当然かもしれないが、一面を物語っている。

- 1、 人に屈せぬ強い心は衆に抜きん出て、議論に優れていた。
- 2、 妬み深く、自分に勝つものを嫌い学友で交際を断つ者が多かった。
- 3、 自分の考えを押し通し、人の判断を聞かない。
- 4、 規則実行にはむごく、有能者重用に愛憎を以って行った。

その三つ。北越戦争の結果、城下の街、領内の田畑、家屋の損害が甚大だったこと、人命損傷が両軍共に戊辰戦争の中でも際立って大きかったことである（両軍の戦死者はウィキペディアによれば、新政府軍1040名、長岡軍1180名）。これは、長岡城を朝廷軍が攻略し、長岡軍が奪還という激戦が続いたことによる結果であった。その意味では、恭順派の危惧は当たっていた。その中でも、長岡藩兵が撤退に当たって、領民の懇願にも関わらず家屋、田畑を焼き払ったことが、後々になっても河井に対する怨念として残っていた。明治2年に建立された碑文の一つ「戊辰刀隊戦没諸士碣銘」には、

「戊辰の変、我が藩権臣迷錯して、妄りに私意を張り、・・・・社稷墟と為るに至る」と書かれている。

しかし、明治政府は維新成就後、国に対する忠義、天皇に対する忠義の念を国民に浸透させる施策に力を入れていく。その世の移り変わりが河井継之助の藩主へ尽くした忠誠を讃える空気を醸成し、忠臣河井継之助の現代に至る像を作り上げたのではないだろうか。

司馬遼太郎が『峠』を書くに当たって集めた資料が、どこまで網羅していたかは分からない。しかも、司馬遼太郎は小説として『峠』を書いたのである。河

井の武士としての筋を通した美しさを表に出して北越戦争の悲劇を描いたのである。しかし、恭順を説いた筆頭家老稲垣平助の手記が現れ注目されたのは、『峠』が出版された後の昭和40年以降だった。これらの研究に目を通していれば、司馬は描き方を変えていたかどうか、こればかりは知る由もない。

参考：『<sup>えつこ</sup>鉞子』内田義雄 講談社 河井と対立した家老の娘鉞子の生涯。

『越後長岡藩の悲劇』磯部定治 新潟日報事業社 佐幕・主戦論者に対し、時代を展望しながら戦争の愚かしさを説いた勤王・非戦論者の立場で書いている。